

たより

『美紗の会』

ニュース

第五号
平成五年三月十日

発行者
「美紗の会」事務局
☎ 03-3441-2726

第十回

『おひきぞめ』開かれる

大型新人続出

例年になく暖かさ、一月末からすでに白梅が綻んでいる。会場でも窓を開け涼風を入れる人、ハンカチで額を拭く者。二月七日国学院大学・院友会館。今年で美紗の会「おひきぞめ」も十回を数えることになった。何時もの様に、師匠のお

母さん、ご家族の心尽くしで準備が行き届き、全員日頃の成果を披露せんものとな腕をさす。舞台上手には、出産のため出演できなかった田島さん夫妻から、届けられた豪華な盛花が彩りを添える。一時半、恒例の『白扇』

で幕が上がる。加藤さんが遅れたため、今年も師匠の妹、康枝さんが司会。出演者に対する温かい紹介の言葉が続く。今回、目立ったのは、三階、増田真知子、御供さんなど大型新人が出てきたこと。「前にちよっとやったことがある」との控え目な発言とは裏腹に、円熟した唄い方には「あれは新人だとしたら松井なみだ」との声も。前回の田島さんのデビューに続く心強い動きに

会主ご挨拶

『おひきぞめ』で

皆様ご苦労さまでした。今日はお天気も良かったし、何より嬉しかったのは、手前味噌のようになりますけれど、皆さんとても進歩が著しくて、私も後ろで胸を熱くして聞いておりました。私の進路が変わったりして皆さまにご迷惑を掛けたりしているにも拘らず、こうして皆さまが一生懸命に動いて下さって、本当に幸せだなと思いが、良い一日を過ご

させて頂きました。西松布唄を継いで四年目になります。私はいまだ、こうしなればいけないという思いが先行して、うまいけれど、ようやくこの頃になって、思いと行動とでも申すのでしょいか、体が一致して芸に対することが出来るようになったような気がして、皆さまにも自然な態度で臨める様になり、自分でも嬉しくいことだと思っております。皆さま素晴らしい方ばかりで、私はこうやって皆さまのお力を頂いて、ここまで来られたのだし、これからも行け

るんだっていう実感でしょうか、希望が湧いてきてとても有り難く思っております。これから私も一生懸命精進して参りますが、皆さまにも今までは楽しみだからと言って少し柔らかくやっていたけれど、この分だけ大丈夫だから、もう少し厳しく芸をお教えしたいながら今日は楽しく過ごさせて頂きました。本場に皆様のお陰でこうして少しずつ前進できると言う喜びを感じながら、今日のお礼の言葉とさせていただきます。

師匠もご満悦。

赤坂組も、何時までも進歩しないのではと今年も新しいことに挑戦と長唄に取り組んではいませんが、なお一層の努力が必要のようだ。もう一つのニュースは、

ニューヨークから糖尿病の教育入院のため帰省中の高橋さんが、入院中の病院から駆け付け、さりとて自慢の喉を聞かせたこと。それにこれも多忙のため稽古を中断している大西さんが師匠の「中休みに合わせましようか」との心配もよそに、一度の練習もなしに大久保さんと師匠の糸で唄ったこと。師匠が皆の進歩が著しいと言っておられたが、確かにこうして裾野の広がりにつづることを感じる。

会に華を添える友情出演は、今回も高藤先生を初め花柳千寿文師。菊音さんは気の合った横溝さんと絶妙のコンビで長唄『松の緑』を聞かせる。また北米公演で師匠と行動を共にし、絶賛を博した西川雅恵師が『青柳の糸』『夜桜』を踊る。最後は西松孝子師の琴に合わせ師匠が地唄『子の日』を披露。一流の芸に時間を忘れる。最後に会長が相撲の鳴戸親方の言葉を引き日頃の精進の大切さを強調する挨拶。例年とは違う話に全員神妙な面持ち。

演目

既にお知らせしているように、四月一日(木)夕方八時から、ニューヨークのジャパンソサエティ(日本協会)劇場において、閑崎ひで女門下の清麗会による地唄舞の公演が行われる。本公演では布唄師が唄と三弦を担当出演。一行は舞のひで女、清女以下八名。

演目は次の通り。

- 一、『萬才』
舞 閑崎ひで女
唄と三弦 西松 清女
唄と胡弓 小原 清歌
尺八 宮崎 青歌
- 二、『ぐち』
舞 閑崎ひで女
尺八 西松 布唄
胡弓 小原 清歌
- 三、『反魂香』
舞 閑崎ひで女
尺八 西松 布唄
胡弓 宮崎 青歌
- 四、『ゆき』
舞 閑崎ひで女
尺八 西松 布唄
胡弓 小原 清歌
尺八 宮崎 青歌

『新入会員紹介』

* 水口素子(みずくちもとこ) 宮崎県出身
一年前から稽古をしていて、途中病気のため一年休み、昨年秋から復帰。銀座でクラブ「サボン」を経営している。「ゆかたさらい」には皆様に三味線を

ご披露したいと、張り切って稽古に励んでいます。

* 織田吉子(おだよしこ) 福島県出身
一月に恵比寿教室に入会したばかりだが、持前の美声と努力でみるみる上達。教室の先輩たちを驚かしています。

ジャパンソサエティは一九〇七年(明治四十年)創立の歴史ある組織で、民間レベルで政治、経済、社会、文化、教育の日本交流を行い、両国の関係改善を促進する活動を行っている。特に第二次世界大戦後は、ジョン・ロックフェラー三世会長の尽力のもとで、文化、美術、教育の紹介を中心に活動を活発化、多様な分野での交歓や協力事業の実を挙げている。

今回は日本の古典芸能紹介の一環として、江戸時代、京都、大阪の上流社会で嗜まっていた地唄舞を取り上げられたもので、斯界の第一人者が顔を揃える。本紙でも何度も紹介されたように先のアマースト、セラム公演で大きな成果を上げた会主が、今回はまた閑崎一門と共に、日米文化交流に貢献することが期待されている。なお本公演では、日米協会のほか日米交流基金、セゾン基金、国立芸術財団からの支援も得ることになっている。一般入場料は二千ドル(約二千四百円)。会員の観覧も大いに期待されている。希望者は加藤さんまで。

江戸「芸能の座」で演技する西の松の女王
西方のマサチューセッツ「研修座」で指導

ジョン・ソルト

西松布詠が1992年11月17日アマースト大学に公演に来る機会をとらえ、本学音楽部で民族音楽学を担当するデビッド・レック教授が彼の26番講座“地球の展望でとらえた作曲法”の学生のため研修集會を催すよう強く望んだので、11月16日午後2時から3時20分まで音楽校舎でそれが催された。

レック教授はすでに講座案内にも書いているが、ここでは彼女の出現を予期していたかのように日本の音楽とゲストを歓迎している。

(講座案内の記述は次の通り)

「世界の音楽の様々な要素＝音階、旋律、構成法、表現形式、楽器、合奏法など＝の探求と、楽曲及び即興曲を作曲する際のその活用。学習はアフリカとカリブのリズム、イスラム世界及びインドのメロディー体系、インドネシアのガメラン合奏法、それに中国・日本の伝統的音楽様式などで、クラス演奏、ゲスト講演、フィルム/ビデオなどを活用する。音楽の素養があれば役立つが必須ではない」

当日は秋の初雪が降り、最初から不思議な高まりがあった。上げ髪を上品に結った布詠が、綺麗な着物姿で、摺り足で教室に入ると、全体の空気は一層高まった。私が、デビッド・レックの講座と同じ時間帯で講義する“近代日本文学：江戸元禄から昭和元禄まで”のクラスと一緒にしたので50人ほど

の学生が出席した。私は西松師と他のゲストを紹介し、日本外務省から留学しているアマーストの学生、飯田シンイチが通訳を買って出た。

西松師は教室の前方で、間に合わせの座布団にきちんと座る。彼女の落ち着いた目鼻立ちと小柄な体つきは、か弱さを漂わせ、それがジャンヌダルク、静御前、楊貴妃などのような内面の強さを隠している。

やがて西松師は鞆を開き分解された三味線のパーツを一つ一つ取り出した。私は、彼女が前以て楽器を組み立て、直ぐ弾き始めなかったのに感心した。彼女は先ず楽器の部分が何で出来ていて、どう組み立てるかを説明した。西松師が静かに楽器の組み立てを進めるにつれ、私は、彼女が学生たちに貴重な経験……彼等は三味線の演奏を見聞きする機会はあるのだが、組み立てるのを見ることは滅多にないのだから……を与えているばかりでなく、そうすることで全員が暫しリラックスし、瞑想的な心の準備をする余裕を与えているのを知った。私達はこうして音楽の宮に向う森に導かれた。

三味線が組み上がり、音程が整えられると、師は小さな吐息をつき学生越しに窓外の雪景色を見た。それから、控え目にだが、本格的なプロならどんな時季にでも何でも唄えるというように微笑みながら切り出した。

「丁度、雪が降っているので“ゆき”という唄を唄います」

彼女が三味線を鳴らし、口を開くと神秘的な音が教室に満ちた。彼女の声は、広い青空をゆっくり飛ぶ鳥の群れを見るのを思わせる静かさと、炎の危険を伴う、解き放たれた心の内を感じさせる激しさの間を振れ動き響いた。

西松師は他に二曲唄い、それから沢山の一般的、技術的質問に立派に答えた。私は多くを学んだ。例えば『きりぎりす』のような、ある唄についての説明には特に興味をそそられた。それは複数のビートを打つドラマーのように、異なったリズムを同時に唄い、演奏する点についてである。

西松師の神秘主義的な三味線と唄の後で、私は詩人藤富保男を紹介し、彼は自分の詩を数編朗読した。80分は瞬間に過ぎた。そして集まった者の殆んどが翌日夕方の演奏会に集まった。

あれから数か月が過ぎた今でも、学生や先生たちが私のところにやってきて「あの三味線奏者は私を忘我の境地に連れて行った。彼女の声はこの世のものとは思われない」といった言葉で、彼等がどんなにあの演奏を楽しんだかを話す。

西松師はアマースト大学で演奏を聞いた人達に大変な影響を与えた。私は彼女の官能的な唄の演奏で、アマーストとその周囲……牛や馬が遊ぶ所に点在する5つの大学……の雰囲気江戸時代の畳の間のように変るようになってくれたらと思っている。

(by Dr. John Solt, Assistant Professor, Asian Languages and Civilizations, Amherst College—齋藤訳)

【解説】
地唄『ゆき』
について

地唄の始めは当時の小歌を大成した石村検校(一六四二没)と虎沢検校(石村検校の門人、一六五四没)に遡ると言われる。

石村検校は堺に住んだ琵琶法師と伝えられ、地唄は京都大阪を中心に発達、他の三味線音楽にも大きな影響を与えた。また三味線音楽の多くが演劇界との繋がりを持ったのに対し、地唄は終始お座敷音楽として行われてきた。

アマースト大学での研修会で紹介され(別項ソルト博士寄稿参照)また四月のニューヨーク公演の演目にもなっている『ゆき』は地唄の代表曲の一つ。峰崎勾当(注)の作曲で、作詞は流石庵羽積(りゅうせきあんはずみ)。

曲名は『ゆき』だが、雪の情景を歌ったものではなく、雪のはかなさに托して心の中の厭世感を表現しているといわれる。

布詠師から拝借した故西松文一師の『ゆき』の稽古のテープで、文一師は「唄う唄心」というのは、隅から隅まで心を入れて、このところはここのうゆう気持で唄うのか、ここはこうとかと、そのくらの気配りがなければいけない」と言っておられる。

布詠師がその心をどう表現するか観賞の楽しみでもある。曲は、身も心も凍てつくような冬の夜、心の傷を抱いて寂しく一人寝する女の哀しく艶やかな情景を淡く描く。

(注) 峰崎勾当は江戸後期、地唄作曲家。「こすのと」「残月」「越後獅子」「東獅子」など。生没年不詳。「参考文献」杉昌郎著「邦楽」(きょうせい刊)

『編集雑記』

* アマーストの公演で好評を得た創作舞踊『椅子と酒』(本紙四号参照)の振り付けについて西川師は「アメリカ行きの飛行機の中で考えついた」と語っていた。

* 芸術家の閃きと言うのは凄いのだと思いが、日頃磨き続ける感性と、不断の努力があつての結果だろう。

* 「おひきぞめ」の後、佐久間会長は元横綱隆の里の「努力に継ぐ努力」との言葉を引いて何事にも努力が大切

だと話していた。

* 努力と聞くと、筆者も含め耳の痛い会員も多いかもしれない。

* 立派な師と、先輩・仲間と交わる事で、努力していると言いつてもいいかもしれない。

* われわれの師を慕って素晴らしい仲間が増える事は嬉しいことだ。アマーストのソルト先生からも「美紗の会」への入会希望が寄せられた。* アメリカ出身の横綱が土俵入りする時代、国立劇場へもクリントンからの祝電が来る日を夢見たい。(た)